69

金瘡医と『金瘡療治鈔』

アンドリュー・ゴーブル

日本における早期の金瘡医学書に延文二年（一三五七）の『金瘡療治鈔』（著者不詳、日文研宗田文庫所蔵）と明徳二年（一三九一）の『鬼法』（富小路範実著）の二種がある。その出現は南北朝内乱の政治分裂による長期戦争の社会背景を反映したものにほかならない。

十四世紀以前の日本における軍事活動、たとえば治承・寿永の乱（いわゆる源平内乱）、承久の乱、あるいは二度に及ぶ蒙古襲来などは短期的で、軍事専門家である武士が特定地域の合戦場で行う限定戦争であるといえる。それに対し、十四世紀、とくに元弘建武年間以降の軍事活動は長期化した広域戦争であった。当時の文学的資料である『太平記』や『梅松論』、史学的資料である合戦手負主文、着到状、譲状（遺言状）などの古文書を検討すると、①戦には武士のみならず百姓や、ゲリラ兵の野伏、現地暴力団の悪党なども参加したこと、②昼夜、季節にかかわらず、全国的規模で同時期的に行われたこと、③負傷を与えるために使用された武器は従来の刀、矢薙に加え、石、木、礫、棒、さらに槍（一三三四年に初出）も多用されたこと、④負傷者の人数が急激に増加し、そのため治療の必需性も激増したこと、これらの状況の変化を指摘しうるであろう。その結果として、日本では従来みられなかった金瘡治療の分野が大きく開かれ、発展することになったのである。

次に『金瘡療治鈔』と『鬼法』を検討することによって判明する初期金瘡医の特徴を指摘しよう。

〔一〕『金瘡療治鈔』は五五条、『鬼法』は四三条からなる。対象となる病症と治法は多少異るが、共通点は少くない。「血留ル事」「死生ヲ見知事」「綿（腸）入ル、事医」「疵クサリタルヲ愈事」「疵ノ浅深ヲ可知事」「筋切タルヲ継事」「笑（矢）尻籠抜事」「骨ノ切タルヲ治事」などに重点が置かれ、勝れた効能のある黒薬・白薬（唐・高麗・日本の三種）が重視されている。

〔二〕両書はいかなる知識や情報に基づいて著わされ

たか。『三因方』『千金方』（各一箇処）を除き、中国・日本の医書からの引用はない。内容すなわち治法・用薬の知識のほとんどは民間臨床医の諸流もしくは口伝に拠っている。たとえば近江国湯次庄野村秘蔵、私ノ口伝、与五将軍、高野聖、土郎般頭ノ流、大和坂本膏薬などがあげられる。また両書の文体は方言を含む当時の口語体で、著者が聴くまま文字にしたものである。

〔三〕用いられる薬剤は、麝香、丁子、龍脳、沈香など一部には舶来品があるものの、多くは日本で入手容易な生薬である。約百種余りの薬材のうち、頻用されるのはハコベラ、犬ノ尻、メハジキ、河骨、牛膝、カタバミなどである。植物生薬以外に動物生薬やいわゆる「人部」の薬物も用いられる。動物・人部薬は黒焼処方に用いられることが多いのは注目される。ことに干児（チゴボシ）のごときものが用いられることは、これら金瘡治法が日本独自の民間医療に基づくことを示すものといえよう。

日本中世の口伝民間医療を研究するには、金瘡分野から着手すれば、効果的な研究成果が期待できると考える。

（米国オレゴン大学歴史学部・北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）